

Title	はしがき
Author(s)	阪上, 孝
Citation	人文學報 (1992), 70: 1-2
Issue Date	1992-03
URL	http://hdl.handle.net/2433/48374
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

は し が き

ここに集められた七つの論考は、1987年4月から1990年3月まで行なわれた〈知識と秩序——近代におけるその再遍過程〉の研究班の成果である。

いかなる社会、いかなる時代においても、知識と社会の秩序のあいだには緊密な関係があるであろう。コントがサン＝シモンをうけつぎながら、この関係に注目して社会の歴史的発展を神学的段階、形而学的段階、実証的段階の三段階に要約し、マルクスが、ある時代の支配的な思想は支配的な階級の思想だと述べたことは周知のところである。私たちもまた、この共同研究をつうじて、両者の関係が大きく変化する近代社会の成立期に焦点をあてて、この問題を考えようとしたのであった。

フランス革命をはさんで18世紀後半から19世紀なかばにいたる時期に、ヨーロッパの社会は政治や経済の領域のみならず知識の領域においても、さらに知識と社会秩序の関係にかんしても巨大な変化を経験した。社会秩序は神によってあたえられた不変のものではなく人間が自分たちで作り上げるものだという観念が力をしめ、そのもとで知識と社会秩序の関係の再編成が模索される。新しい社会秩序を作り出すのに必要な知識とはいかなる知識であるのか、またそれをいかにして生産し、行き渡らせるのか、これがこの時代の問題であった。

フランス革命はこれらの問題を激烈な仕方で開催させた革命でもあった。世俗的で科学的な知識によって個人を解放し、合理的な社会秩序を打ちたてるとするのは啓蒙主義の主題であり、フランス革命もこの問題関心をうけついだ。しかし啓蒙主義においては、啓蒙されるべき個人はきわめて限定されており、それに応じて社会の改革も啓蒙的知識人と君主の同盟によって遂行されるべきものであった。それにたいしてフランス革命はこの主題を、人民が主権者になり、世論が圧倒的な力をもつというまったく新しい条件のもとで遂行しようとした。フランス革命は政治の民主化と統治の合理化を同時に追求することを自らの課題としたのである。これが知識と社会秩序の関係の問題を先鋭なかたちで提起させた条件であった。こうしてすべての1789年人が公教育の問題に深い関心をよせ、人民を新しい社会にふさわしい市民として〈再生〉させるためにありとあらゆることが企てられた。革命祭典、十進法にもとづく度量衡、共和暦、地名や人名の変更などなど。むしろあらゆるものが人間の〈再生〉のための武器と考えられたというほうが適切であろう。

知識と社会秩序の関係のこのような変革において、鍵となった観念は〈国民〉の観念であった。それも、共通の生地や言語といった事実にもとづいてはいるが、それ以上に価値的な内容をもつ理念としての国民、あるべき存在としての国民が問題であった。この国民の観念を軸とする知識と社会秩序の変革は、以下のいくつかの論考が明らかにしているようにフランス革命

において劇的なかたちで展開されたけれども、この問題はフランス革命のみにかざられる問題ではなかった。誕生間もないアメリカ合衆国においてもあるべき国民像の確立とそれによる社会的統合は焦眉の急を要する問題であったし、ナポレオン戦争での敗北という状況のもとでフィヒテが訴えた国民もこの国民にはかならなかった。近代国家が国民国家を枠組みとする以上、その形成過程において国民の観念が旋回軸となるのは普遍的な現象というべきであろう。

知識が社会秩序の形成にたいして積極的な役割を果たすためには、それを生産し、全国に普及させるための装置系、アルチュセールの言葉を用いれば「国家のイデオロギー装置」がなければならない。とりわけ近代国家の秩序の根底を支える〈国民〉が抽象度の高い観念であるとするれば、それだけいっそう人々がそれをわがものにするのを可能にする装置の重要性は増大するであろう。じっさい近代国民国家の形成過程は、同時に、学校をはじめとするイデオロギー装置の創出と再編の過程であった。

こうして私たちがこの共同研究で考えようとしたのは、知識による秩序の確立と知識の制度化のあいだでくりひろげられる弁証法と要約することができるであろう。この弁証法はさまざまな場面で無数の問題をはらみながら展開されたのであって、私たちの試みはその入口の第一次的接近でしかなく、多くの問題は、この共同研究につづく〈知識と秩序Ⅱ—近代社会とエリート層の再編過程〉にゆずらざるをえなかった。また、中間的報告という性格からして、共同研究としての統一性よりも執筆者の関心を優先させることとした。

種々の都合で論文を寄せていただけなかったが、研究会に参加し、報告をいただいた方々、浅田彰、大浦康介、岡本明、木崎喜代治、小西嘉幸、佐伯啓思、芝井敬司、進藤雄三、田中秀夫、谷川稔、J.-M. ドムナック、服部春彦、林学、樋口勤一、光永雅明、森原隆の諸兄、編集と校正に協力いただいた光永雅明、水嶋一憲の諸氏に謝意を表したい。

1992年1月

阪 上 孝